

Fukuまる

探訪！ 魅力あふれる会津・喜多方へ

東北エネルギー懇談会では、福島県の復興支援を目的として、地域の商工会議所などのご協力を得ながら、福島県会津地方の観光支援として、電気新聞特別号「まるごと福島 Fukuまる」(会津・喜多方エリア) (タブロイド判8ページ)を発行しました。

本誌のこのコーナーで、「Fukuまる」誌面の一部を転載してご紹介します。「ひろば」読者の皆さまも、ぜひ会津・喜多方エリアの観光・文化情報をお楽しみください。



第一只見川橋梁(秋)

奥会津郷土写真家
ほしけんご
星賢孝さん



只見線の魅力を写真としてSNSなどで発信し、海外の観光客を日本に呼び込むインバウンド推進の立役者。金山町在住。地元建設会社に47年間勤め、在職中から独学で写真に取り組み、奥会津郷土写真家として活躍しています。

企画：東北エネルギー懇談会
協力：福島商工会議所・会津若松商工会議所・会津喜多方商工会議所・会津若松観光ビューロー・七日町通りまちなみ協議会・喜多方観光物産協会・福島県観光交流課・福島県生活交通課
発行／2024年10月
発行所／一般社団法人 日本電気協会新聞部 電気新聞メディア事業局

只見線おすすめスポット

只見線を
撮る
楽しむ

Tadami Line

写真・奥会津郷土写真家 星賢孝氏

福島県の会津若松駅と新潟県の小出駅をつなぐ全長約135kmの只見線。東日本大震災後の2011年7月の豪雨被害で一部区間が不通になりましたが、2022年10月に全線運転再開しました。只見線は地域の大切な交通手段である一方、ローカル鉄道ならではの風情や四季折々の豊かな自然が楽しめるため、国内だけでなく海外からの観光客も数多く訪れています。そこで、奥会津郷土写真家の星賢孝さんおすすめの撮影スポットをご紹介します。



只見線を代表する撮影スポットの一つ。星さんは冬だけでなく、「川霧の第一只見川橋梁も大好き」と話します。



ファンの間では、「大志ビューポイント」と呼ばれる人気スポットです。星さんは「真っ赤になった夕日もおすすめ」と言います。



星さんが最近注目するのが、このスポット。ザイルを担ぎ、2時間かけて道なき道を登る必要はありますが、「整備して上級の登山コースにすれば、みんな行きたくなるのでは」と期待。

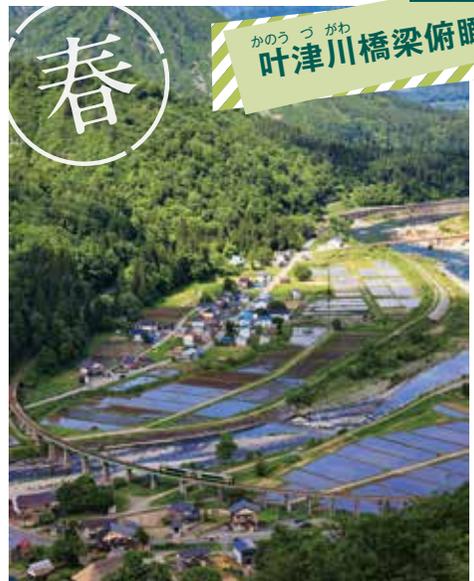
只見線の橋梁は、それぞれ個性がありますが、第三只見川橋梁は、「昔から非常に良いポイント。紅葉も川霧も楽しめる」と星さんは強調します。



真奈川橋梁

「会津のmatterホルン」と呼ばれる蒲生岳をバックに、列車を撮影できる絶好のスポット。星さんは見晴らしが良くなるよう地元住民が撮影環境を整備し、「最高のスポットになった」とか。

只見線MAP



かのうづがわ 叶津川橋梁俯瞰



絶景と郷土の味を楽しむ

喜多方は全国的にラーメンで有名ですが、独自の食文化も魅力です。会津藩に納めてきた北塩原の山塩は希少性や味わいが評価される一方で喜多方は街並みや豊かな自然も見どころです。季節に合わせて、様々な花や紅葉は見逃せません。そこで、注目される絶景・味を紹介します。

絶景を愛でる

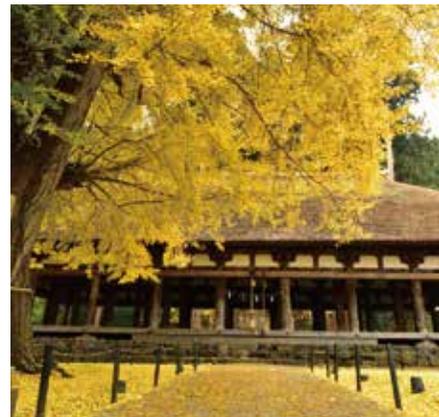


日中線のしだれ桜とかつて運行されていたSL

・日中線しだれ桜並木 ・長床の大イチョウ

喜多方は春から秋にかけて様々な花が楽しめる。秋には紅葉がおすすです。春は桜がイチ押し。代表的な観光スポットが日中線のしだれ桜並木です。日中線は喜多方駅から旧熱塩加納村（現喜多方市）の熱塩駅までの1.6kmをつないだ路線で、1938年に開業しました。その後、幾多の変遷の中で利用客は伸び悩み、貨物営業も安定せず、赤字路線からの脱却がかなわず1984年に惜しまれながら全線廃止となりました。

その後、日中線の跡地の一部が遊歩道として残され、喜多方駅から徒歩約5分の遊歩道入口から全長約3kmの区間には、約1000本のしだれ桜が植栽されました。長い冬から春の到来



長床の大イチョウは紅葉の時期の喜多方では一番のおすすめ

を告げる満開の桜を一目見ようと、毎年大勢の観光客が訪れます。

このほか、春は福寿草や菜の花、夏はアジサイやシヨウブ、ひまわりなどが喜多方の各所で見ごろを迎えます。初夏の雄国沼湿原は「コウキスゲ、レンゲツツジ」などの高山植物が楽しめます。

秋は長床の大イチョウが注目です。1055年源頼義の勧進とされる新宮熊野神社は熊野三山をまつり、内部に仕切りや建具がなく吹き抜け構造が特徴の拝殿の長床が有名です。ここは修験者の道場として、また神楽などの祭礼にも使われたといわれます。その長床の傍らに根を下ろすのが樹齢850年といわれる神木の大イチョウ。秋の紅葉の季節には、長床の周りがおびただしい落ち葉で黄色のじゅうたんのように見えるほど。恒例のライトアップは、幻想的な雰囲気になります。

喜多方・北塩原を食す



不純物などを取り除く品質検査の工程

・会津山塩とは

会津山塩は、磐梯山のふもと、弘法大師の開湯伝説がある北塩原村の大塩裏磐梯温泉の源泉を利用して製造されています。太古の海水がグリーンターフと呼ばれる地層に閉じ込められ、高温の地下水に溶け出した高濃度の温泉水を煮詰めて作ります。海水とは異なる特殊な泉質で、独特な風味が特徴です。その歴史は古く、江戸時代は盛んに製造されて会津藩に納められ、明治時代には皇室にも献上。その後、塩の専売制度下で製造できませんでしたが、2005年に試験製造を始め、2007年に会津山塩企業組合を設立、製造を本格的に再開しました。

茶道文化に魅せられて 会津の茶道

過去・現在・未来

城下町である会津若松の基礎を築いた戦国武将の蒲生氏郷。実は千利休を師と仰ぐ一流の茶人でした。その当時に創建されたと伝わるのが、鶴ヶ城内の茶室「麟閣」です。そうした歴史に思いをはせ、現在は、大正浪漫調のまちづくりで観光客が集まる市中心部の七日町通りは、抹茶とスイーツを提供するカフェも多く、気軽に茶の湯の世界を楽しめます。会津の茶道を巡る過去、現在、未来を紹介します。

歴史

会津の茶道文化歴史をひもとく



鶴ヶ城の天守と走長屋



天守近くにある麟閣



蒲生氏郷画像(模写)会津図書館蔵

戦国時代、会津は輩名家が長年治め、伊達政宗入府後、豊臣秀吉の命を受け、1590年に松阪から移封されたのが蒲生氏郷です。氏郷は秀吉の右腕として活躍した有能な武将であり、キリシタン大名でした。領主として鶴ヶ城を築き、「若松」の地名を使い始め、まちづくりや商工業の発展などに尽力しました。

城内で大切に使われていました。しかし、戊辰戦争後に鶴ヶ城が取り壊される時には、この茶室も同時に失われないうち、地元の茶人である森川善兵衛が自宅に移築し保全に努めました。それが1990年、市制90周年を記念して現在の場所に移築され、現在は多くの観光客が訪れています。

茶人でもある氏郷は、「利休七哲」と呼ばれる武将の弟子の中では筆頭に挙げられ、茶の湯に精通していました。秀吉の逆鱗に触れて利休が切腹した際には、氏郷は利休の茶道が途絶えるのを危惧し、継承者の子である千少庵を会津にかくまい、「千家再興」に心を砕いたとされます。そのかいあって、少庵の孫の世代、現代につながる武者小路千家、表千家、裏千家の三千家が興されました。茶室「麟閣」は、少庵が氏郷のために建てたと伝わり、長く鶴ヶ

現代

現代に息づく茶道



「麟閣」で催されている茶会の様子

「麟閣」を望むお茶席で提供される抹茶と菓子



会津若松は、蒲生氏郷、千利休の子である千少庵らにまつわる茶道の歴史が刻まれた場所です。今は茶の湯を親しめるのは、茶室「麟閣」や江戸時代の領主の別荘として使用された「御薬園」(国指定名勝会津松平氏庭園)などが有名です。「麟閣」には観光客が詰めかけ、時には茶室で会津の茶道文化や「麟閣」の歴史を学びながら、抹茶と菓子を楽しみ、気軽に茶道に触れることができるイベントも。また敷地内には抹茶を味わうことができ、お茶席が設けられています。また、七日町通りまちなみ協議会では、市民が茶の湯をもっと気軽に楽しみ、観光にもつなげようとしています。氏郷の茶道にまつわる歴史を広く紹介し、レトロな雰囲気の人気な七日町を「茶の湯の街」にするため、抹茶を気軽に味わえるイベントや茶道無料体験教室を行っています。